

火花

第 46 号

1985, 6

火花

第46号 1985, 6

共産主義者同盟(火花)

◎

共産主義者同盟(火花)発行パンフ紹介

P
25

◎

またしてもマルクスの名による

マルクス主義の粉碎

P
10

◎

夏季カンパを訴える

P
9

◎

「反戦・反安保・反核」と中核派の

帝国主義批判

P
1

「反戦、反安保、反核」と中核派の

帝国主義批判

さいきん、中核派は「反戦・反安保・反核闘争の発展のために」というサブタイトルをつけた「米帝の戦争政策と日帝の軍事大国化」（榎山康次）、という「大著」を発売した。また、「現代帝国主義論」（島崎光晴）、現代帝国主義分析—欧州編」（日比野健策）、「中東危機と石油問題」（磯野昌幸）などを連続して出版している（いずれも前進社から）。さらに、共産主義者「第六〇号」では、学習ノート「現代帝国主義論の方法」（峰山武夫）を発表している。このような理論活動は、七〇年代中期に帝国主義批判をめぐる革マル派と行った論争（「共産主義者」別冊号）に収録されている）の直接的継承である。それは、運動における逢着問題を彼らが現代帝国主義批判と戦術問題において突破せんとしていることを示している。

われわれは、ここにみられる理論活動をそれなりに評価するものである。しかし、であればこそ、その限界・欠陥を指摘せずにはおけない。今回、われわれはそれを、「反戦・反安保・反核と中核派

の帝国主義批判」として行い、彼らの社共、革マル、第四インターなどに対する批判の限界を暴露する。

中核派の主張のうち、否定すべきだと考えているのは、第一に「反帝・反スタ」論、第二に宇野理論、第三に図式主義である。第一についてはすでに「反スタ・トロツキズムの誤り」（『火花』三九）で、第三については「先制的内戦戦略」批判」（『火花』三三）で行っている。しかし、現在の論戦状況を考慮して重複することをいとわず提起してきた。

一 「体制間矛盾論」批判の限界

「反戦・反安保・反核」に対する中核派の態度を検討していくにあたって、まずみておかねばならないのは、彼らの日共、第四インター批判である。それはスターリン派（日共）の「体制間矛盾論」に対する批判—日共は「非同盟」路線のもとで「体制間矛盾論」の

修正を行ったが、その基本的な視点は継承している。これは、現在の彼らの「反核国際統一戦線」の主張からも明らかである。

中核派は「体制間矛盾論」批判を「社会主義」がスターリン主義的に変質しているという立場から行っている。

「帝国主義とスターリン主義の依存・対立」という関係は、帝国主義と社会主義の分裂そのものではまったくなく、それがスターリン主義的に変質させられたものだけである」（『現代帝国主義論』P6）。

ここにおける批判の意義をあえてさがすとすれば、スターリン派がソ連・東欧諸国、中国などを同一の「社会主義陣営」として美化していることの欺瞞性を暴露した点にある。第四インターの「墮落した労働者国家」規定に対する批判も同じである。

「第四インターはソ連を「墮落した労働者国家」と規定する。そして、帝国主義にたいしてはソ連スターリン主義を無条件で擁護する立場にたつのである。これは完全なスターリン主義であり、現代世界の認識論としては完全な体制間矛盾論である」

「労働者国家がスターリン主義に反動的、反革命的に変質した」ということを第四インターは絶対に認めようとしないのである」（『米帝の戦争政策と日帝の軍事大国化』P四四六）。

第四インターは今日、ソ共二六回大会（八一年二月）で公然と表明された「軍事的均衡が平和を維持する」という立場を承認するに致している。すなわち、「ソ連邦の核軍力こそが、核抑止力」としてアメリカ帝国主義の核使用にブレーキをかけてきた」（『世界革命』八三三号）と述べている。中核派が、これを次のように批判しているのは正し。

「米帝が核攻撃をためらった理由は、核攻撃をしても侵略戦争に勝つ見込みがなかったこと、むしろ米帝の核攻撃にたいしてアメリカと全世界のプロレタリアート・人民の革命的なたたかいが爆発することをおそれたことにある」（同P四九九）。

したがって、ここで問題なのは、中核派のスタ批判の内容である。「世界革命の実践的完遂を放棄し、それに反革命的に敵対し、一国社会主義の自己目的化に共産主義を歪曲し、ソ連の対外政策のリアル・ポリテックスの道具に国際共産主義運動を反動的におとしめるといふスターリン主義的裏切りの路線」（『共産主義者』六〇号P一九三）。

「世界革命を云々しつつ、それを裏切るものとしてあり、祖国防衛主義的な軍力強化と、いわゆる平和共存路線を基軸とする帝国主義諸国との合従連衡政策へと変質してしまっている」（『米帝の戦争政策と日帝の軍事大国化』P二二六）。

なるほど、スターリン主義を「一国社会主義の自己目的化」「ソ連の対外政策……に国際共産主義運動をおとしめ」「世界革命を……裏切り」「帝国主義諸国との合従連衡政策へと変質」と批判することはまちがいない。だが、そうしたレベルであれば、トロツキーが提起してきたことである。トロツキーの敗北を考慮するならば、「世界革命の裏切り」「一国社会主義の自己目的化」といった批判は、その中味、とりわけコミンテルンやプロ独権力の任務をめぐって行うことがポイントである（ただし、これはソ連など内部の階級闘争と結びつくことを不可欠とする）。

では、なぜ中核派はトロツキーの敗北を知らながら、トロツキーレベルのスタ批判にとどまっているのか。それは彼らにとってのスタ

批判が「ヘスターリン主義の歴史的破産とその根本的矛盾の爆発の必然性」が特殊規定として把握しなければならぬ」（『現代帝国主義論』P八）ということに於かれてはいるからである。

「スターリン主義は……官僚制的に疎外されたスターリニストレジュームの延命、展開を追い求めるものとして存在している」（同P二二六）。

みてのとうり、彼らはスタ批判を現代帝国主義批判とは区別して別個にとりあげ（二元的に）「スターリニストレジューム」としての「根本矛盾の爆発」として暴露する立場をとっている。したがって、彼らのスタ批判の中心は、ソ連などにおける種々の矛盾をあれこれ指摘することが中心となり、コミンテルンやプロ独権力の任務をめぐるスターリン派との党派闘争を後退させている。

中核派の「体制間矛盾論」批判は、このように現代世界の二元的把握、スターリン派との党派闘争での日和見主義という欠陥と結びつけている。

II 「スターリン主義（ソ連） 起動力」論批判の欠陥

七〇年代中期以降の革マル批判において、中核派がとってきた立論は、「現代世界を根本的に規定しているのはスターリン主義か帝国主義か」である。これは革マル派のスタ批判の特殊性に規定されている。

革マル派は、現代世界を「帝とスタの相互依存・相互反発」としてとらえている。つまり「帝国主義とスターリン主義をともに権力者であるとし、その力学関係として問題をたてている」この立場か

ら彼らはこの間の民族解放闘争など国際革命運動を「米ソ代理戦争」としてプロレタリアート・人民を罵倒し、敵対してきた。また、七〇年代の「ソ連スターリン主義」の政策を「二重政策」（帝国主義国に対しては平和共存外交を展開し、特定の後進国に対しては「革命の輸出」方式を貫徹する）と評価してきた。そして、さいきんではそれをいっそう純化させ「ソ連スターリン主義者」が「世界制覇」をねらって、スターリン・インターナショナルをめざしている」と評価するに致している。

「『世界革命過程』を現在の促進しようとしているクレムリン官僚」（『解放』八六七号松島論文）。

「われわれは『インターナショナル（党）』を実体的基礎として『世界革命』を進行させるといふソ連スターリン主義者の世界制覇戦略を基本において『一国社会主義』すなわちスターリンナショナリズムにとづくものとして把握しているのだ」（『解放』八六八号津宮論文）。

このような主張にたいし中核派は「ヘ帝国主義の根本的延命とその基本矛盾の爆発の不可避性が主導的規定として把握されなければならぬ」（『現代帝国主義論』P七）とする。そのうえで「ソ連脅威論」「反共排外主義」に屈服した「容帝反共主義」であると批判している。以上に関する限り中核派の革マル批判は正しいものである。

しかし、中核派もまた現代世界の「主導的規定」として帝国主義を強調する一方で「帝とスタ」の相互関係を力学主義的に問題にしている。革マル派とのこの点ではその独特の方法論にある。それは「段階・過渡・変容」というものである。つまり、現代は

「帝国主義段階」にあり、「帝国主義から社会主義への世界的過渡期」であるが「この帝国主義と社会主義の分裂は革命ロシアのスターリン主義への変質をテコとして、帝国主義とスターリン主義の平和共存、つまり相互依存と相互反発的な関係へと変質してしまつた」（『米帝の戦争政策と日帝の軍事大国化』P一四七）とする。

この方法論は、観念的なものであって、現実分析としては「段階」「過渡」をお題目化するものとなっている。

「スターリン主義の本質的な問題性は、ひとつは世界革命の放棄としてあらわれる。それは帝国主義の根本的延命を許し……その根底には帝国主義との死闘・蜂起戦への恐怖があり、帝国主義への屈服と追従がある」（同P一五七）。

「なによりも革命ロシアのスターリン主義的変質によって帝国主義が基本的に延命し、帝国主義の基本矛盾の爆発が現代世界の危機の主導的基軸をなしているということである」（同P一五九）。

みてのとうり、一方ではスターリン主義を根拠に帝国主義の延命を説明している。だから、その限りでは帝国主義はスターリン主義に「対抗」しているとする。他方では「現代世界の主導的基軸」として「帝国主義」を位置づけている。これは次の主張となつてあらわれる。

「（ソ連スターリン主義は）帝国主義の対ソ対決政策にたいしても世界革命の立場と路線を放棄してしまつてはいるがゆえに、本質的に受動的にしか対応できず、基本矛盾の爆発にまきこまれたり、帝国主義の重圧にあえがざるえないのであり、そのなかで軍事対決・軍事侵攻といった対抗的に積極的な対応を示す

こともあるのである」（同P二三七）。

といった、ここでいう「本質的に受動的」で「対抗的に積極的」ということと、革マル派がいう「二重政策」と実際のどう違ふというのであろうか。また「本質的」と「対抗的」とを恣意的に区別することが無意味なのは戦争とか軍事の本質は相手を前提にし、それに「対抗的」なものとして存在するからである。

革マル派の主張を「米帝を免罪する『スターリン主義起動力』論」「ソ連世界制覇を狙う赤色帝国主義」論と批判する中核派自身このため次のごとく主張することになっている。

「スターリン主義の軍事対抗は世界革命に敵対し、世界戦争危機を激化させるいまひとつの原因である」（同P四四三）。

「反帝・反スタ」派の中核派は結局、「ソ連スターリン主義起動力」論批判に失敗している。

III 国家独占資本主義論（革マル） 批判と宇野の位拠

革マル派は現代帝国主義がスターリン主義的に規定されて、変質しているとの立場をとっている。すなわち、大内の国家独占資本主義論に依拠して現代の国家独占資本主義を「帝国主義の第二段階」として恐慌、戦争として発現する「資本制生産の基本矛盾が部分的に解決されつつある」とする。

「帝国主義の第二段階のもとにある現代資本主義」（『現代唯物論の研究』黒田寛一）

「いまや独占資本主義が国家資本主義という形態であらわれていることは、資本主義の枠内においてであるが、ブルジョア国

家権力をとおして資本制生産の基本矛盾が部分的に解決されつつあるということだ」(『現代における平和と革命』黒田寛一) 今日、独占資本主義がレーニンの帝国主義段階とは区別される新しい段階であるとしたのは構造改革派の諸君であり、これを批判して登場した大内力の『国家独占資本主義論』も同一の土俵の上にたっている。革マル派はこの大内力の『国家独占資本主義論』をとり入れている。共通しているのは、現代帝国主義は恐慌や世界戦争を回避できるようにしたところにある。

これに対し中核派は現代帝国主義が恐慌や世界戦争を回避しえるものではないとして、次のごとく主張する。

「現代帝国主義は、一九三〇年代を中心とする両大戦間期はもとより、第二次大戦後においても特殊戦後の形態をとるとはいえ、資本主義の帝国主義段階における段階規定性によって、その運動と体制が根底的に支配されているものとしてある」(『共産主義者』六〇号P一四五)。

これはその限りで正しいものである。しかし、他方では「現代帝国主義は、その基本政策として『国家独占資本主義政策』を展開している」(同P一四七)とする。その上で次のように述べている。

「三〇年代の経験が示しているように、帝国主義諸国は、金本位制の停止、管理通貨制度の採用、貿易と為替の管理を前提条件としつつ、国家独占資本主義的政策を強行的に展開した」(同P一八七)。

「管理通貨制度は……それは、帝国主義間の争闘戦の勝利をもぎとるといふ契機によって決定的に規定されたものだということである。いかえれば、国家独占資本主義的政策は、争闘

戦原理の政策化以外のなにものでもないのである」(同)。

ここで中核派は一九三〇年代の「管理通貨制度」などを前提として国家独占資本主義政策があるとし、それを「争闘戦原理の政策化」として説明している。管理通貨制度が「争闘戦」を契機としているということはまったくまちがっているわけではな

だが、「争闘戦」ということであれば、帝国主義時代に入ってから、とりわけ第一次大戦以降、あてはまる。実際、レーニンはその時に「独占資本主義の国家独占資本主義への転化」について述べている。にもかかわらず、彼らはこれを三〇年代の「管理通貨制度」において強調している。これは明らかに理論上の不整合である。

中核派の大内力や革マル派に対する批判は、大内力や革マル派が金本位制の解体、管理通貨制度をもって金融資本の新しい政策を「発見」して「帝国主義の第二段階」としたのに対し、「争闘戦原理の政策化」ということで「左」から帝国主義の政策を批判する立場にたっているのである。このようになってきているのは、中核派もまた大内力や革マル派同様、宇野の方法論に依拠しているからである。

宇野は資本論を「純粹資本主義」モデルに関する完結した閉鎖体系として純化し(原理論)、これの枠に入らないものは理論一般化の対象にはなりえないとした。さらに、資本主義の発展段階を経済政策の違いをメルクマールとして「重商主義、自由主義、帝国主義の段階」とし、その基礎に支配的な資本形態の違い(商人資本、産業資本、金融資本)に求めた。この原理論、段階論と現状分析という三段階論こそ宇野の方法である。特徴的なことは、帝国主義批判を金融資本の政策批判として行い点である。

IV 「不均等発展」について

中核派は次のごとく主張する。

「レーニン帝国主義段階論の現代的適用における第二の核心点とは、現代帝国主義の世界的運動が帝国主義の不均等発展の法則によって決定づけられたものとしてあり、帝国主義諸国家の分裂と対立、争闘戦の激化をくり返してきたというところにある」(『共産主義者』六〇号P一六三)

これをもって、中核派が「租国敗北主義」「内乱」を主張しているのは周知のところである。しかし、この主張において、彼らが「不均等発展」に陥っているのはなぜだろうか。問題は「不均等発展」の理解のしかたにある。

中核派は「不均等発展」ということをもっぱら、帝国主義諸国間としてのみ問題にしている。しかし、不均等発展はこのことに限定されるものではない。

この言葉は、遅れた国々が金融資本の網に包摂されることによつて、その国の資本主義化を急速に進めること、他方では資本輸出が停滞と腐朽化、また「金利生活者国家」特有の寄生性を強めることとしてもある。このことを中核派はまったく理解していない。

われわれは「不均等発展」「争闘戦」から「租国敗北主義」「内乱」を主張するとしても、中核派のごとく一国主義的ではなく、先進国プロレタリアートの最大限緊密な同盟と行動の統一、かつ民族解放闘争との結合として提起しなければならぬ。

中核派がこの宇野に依拠している限り、大内力や革マル派を全面的に批判することができず、レーニン帝国主義論を真に革命的に復権することはできない。なぜなら、それは帝国主義批判の不可欠な課題である独占の理論が欠落するからである。

資本主義の独占的段階におけるポイントとは、A資本主義的自由競争が資本主義の独占に転化したことである。もとより、これは単に一国的なこととしてだけでなく、独占の形成、金融資本の集積(金融寡頭制)の進んでいる国は世界資本主義経済においても、独占的地位にたつことを意味する。少なくとも、このことをふまえて「資本の輸出」「資本家団体のあいだでの世界の分割」「列強のあいだでの世界の分割」「寄生性と資本主義の腐朽化」「プロレタリアートの社会革命の前夜」などを帝国主義批判としておさえる必要がある。

ただし、この独占は「自由競争」と絡みあって存在する。レーニンはこう述べている。

「純粹の独占ではなくて、交換や市場や、競争や恐慌とならんで存在する独占―これが帝国主義一般のもっとも本質的な特質である」(『全集』二四P四九二)。

「帝国主義は資本主義を上から下まで改造するものではなく、また改造することもできない。帝国主義は資本主義の諸矛盾を複雑にし、激しくし、自由競争と独占とを『絡みあわせる』交換、市場、競争、恐慌等々を排除することは、帝国主義にはできない」(同)。

中核派は宇野の理論に依拠しているがゆえに、この独占の問題をまったく曖昧にしている。このことこそ彼らの決定的欠陥である。

V 戦術をめぐって

中核派の帝国主義批判は以上のとおりである。このことは反戦・反安保・反核運動においても、諸階級の相互関係がどのようにあらわれているかの分析を、とりわけ日帝の外交・軍事をめぐる諸階級の亀裂を考慮することを不可能にさせている。

戦術問題と帝国主義批判の関係は彼らにあって「革命的情勢」の成熟として収斂するものとなっている。

「重要なのは、帝国主義の世界戦争が革命的情勢を成熟させること」(『現代帝国主義論』P十三)。

しかし、「革命的情勢」の問題は、単に「帝国主義の世界戦争」の関係においてだけでなく、党の側の活動との関係においてとらえる必要がある。それは「プロレタリアートの全体ないし、多数者がプロレタリアートの党を支持しているだけでなく、非プロレタリア勤労大衆もが支持するか、中立化するよう意識的に活動していくこと」(『火花』No四一P八)である。この問題について中核派が主張しているのは次のことだけである。

「戦後史全体をとうしていまだやり残している階級決戦を日帝ブルジョアジーは労働者人民にたいして強行する以外に、こんにちの体制的危機の状態を突破することができないところにいるのである。逆に労働者人民にとっても戦後史のいつさいをかけた階級決戦をたたかぬき、戦後革命の敗北をいまこそ乗り越えて日帝打倒の勝利をもぎとらねば、ふたたび侵略戦争、帝国主義間戦争の道へとつきおとされてしまうところにある。たたかっている」(『米帝の戦争政策と日帝の軍事大国化』P

三七二)。

中核派は日帝が「階級決戦」をやった上で侵略戦争へと進むとしている。これは恣意的な図式である。

戦争は相手のあることである。一方の側が「階級決戦」をやって準備を整えるまで他方の側が攻撃をまっくくれるわけでもないだろう。また、米帝のベトナム戦争、英帝のマルビナス戦争を見れば「階級決戦」がなくても、帝国主義は戦争を行うことができるのである。日帝だけが例外だと考えることはできない。日本のブルジョアジーは「戦争放棄・軍備放棄」の条項をもつ憲法のもとでも公然と軍隊をもち、軍拡を促進してきているのである。

また「やり残している階級決戦」などというののもどうであろうか。「階級決戦」という概念をブルジョアジーとプロレタリアートの国家権力をめぐる「決戦」と解するなら「蜂起」のことである。そのような「階級決戦」は戦時、平時をとわず、その時期に応じた方法で党的に準備されるべきであり「蜂起」の時機は国際情勢や諸階級の動向を判断して決定すべきことである。

しかし、中核派の場合「階級決戦→帝国主義戦争」とそこでの「階級決戦」で日帝を打倒する(具体的には三里塚闘争→日帝打倒)という図式になっている。そして、反戦・反安保・反核運動への態度をかかると運動をとり込むこととしている。

中核派は帝国主義の危機をアジアーションし、武装闘争・非合法組織を志向することで小ブルジョアジーや労働者の上層部分しか代表しえない社共、革マル派とするどい対立をつくり出している。にもかかわらず、労働者階級の下層部分を政治的に代表しえず、反戦・反安保・反核運動に拝跪しているのはこのためである。彼らの日

和見主義を突破するためには、この運動の中であらわれている諸階級の間での亀裂を分析し、プロレタリアートの態度を決定していくことが求められている。

現在、独占・大ブルジョアジーは軍拡と反共・排外主義をもって存在し、非核・軍縮・非同盟をもって小ブルジョアジーが存在する。この小ブルジョアジーの無力性が露呈されており、労働者階級の上層部分はますます大ブルジョアジーの政治と融合しつつある。

プロレタリアートに求められているのは独占・大ブルジョアジー

と徹底して闘争することで、小ブルジョアジーを無害化することである。そのための政治スローガンは、帝国主義の一切の武装に反対すること、革命の軍隊・全人民の武装(ソビエト)および国際プロレタリアートの国家機関をとうさない直接の同盟である。このスローガンをもち革命的に登場していく時、プロレタリアートは始めて、中核派の限界を突破して、社共、革マル派との全面的な党派闘争を行うことが可能となり、真の多数者である労働者の下層部分を代表し、組織しぬくことができるだろう。

訂正

「火花」第四五号P十三上段十三行目 削除

夏期カンパを訴える!!

全国の「火花」読者諸君！ 活動家諸君！

共産主義者同盟（火花）は夏期一時金の時期にあたり、

資金カンパの圧倒的な集中を訴える。

中米ニカラグアでは米帝・レーガンによる全面的経済封鎖と軍事的恫喝に抗した闘いが持続されており、南朝鮮では「四・一九革命」二五年に際して二万人におよぶ労働者・学生が街頭にうって出、デモンストレーションを貫徹した。

われわれ日本のプロレタリアートはこれらの闘いに最大限の注意を払い、教訓を学びながら、なしうるすべてのことをプロレタリアートの国際主義にもとづいてやり抜かねばならない。

そのためにも、われわれはスターリン主義や、社共と手を切ったプロレタリアートの前衛部分を思想的・政治的・実践的に統合していく闘いを急がねばならない。理論闘争を闘い、路線闘争を闘い、非合法組織・軍事組織の建設を進めるとともに機関紙「火花」をさらに拡大すること、全国的展開をめざす運動戦・宣伝・扇動・組織に一つ一つ勝利していくことが求められている。われわれの党活動は今や一段と強化・拡大が要請されている。財政的基盤をかためることは、そのための不可欠な保障である。新たなインタービューロー建設の事業への積極的な参加と圧倒的な資金カンパを切に訴える。

一九八五年六月一日

またしてもマルクスの名によるマルクス主義の粉砕

柄谷、岩井、浅田君らの「新説」批判とマルクス商品・価値論の擁護

目次

はじめに

- I 価値形態が核心としつつ価値形態を分析しない柄谷とその仲間たち
- II マルクス商品・価値論を投下労働価値説に逆行させる代々木一派
- III 象徴貨幣論への橋渡し役たる広松渉
- IV 柄谷君らのマルクスの名によるマルクス批判
- V 柄谷君たちはどういう現実に支えられているか

(以上本号)

(以下次号)

はじめに

エコロジストが中心になって、マルクスに近代(合理)主義的限界を見出すところからはじまった。この数年のマルクス離れ、マルクス葬送の歩みは、経済人類学やポスト構造主義を唱える人々によって、商品・価値論が否定されることによって、最終的に仕上げられた。この間の道程において、従来のマルクス粉砕劇と違っているのは、参加者たちがおしなべてあれこれのマルクスの言葉や章句に依り、それを公言しつつ、しかも同時にそれまでになく声高にマルクスを批判したところにある。マルクス主義が従来もっていた理論上の権威が喪失し、様々のイデオロギーが勝手気儘にマルクスを援用するといった今日のイデオロギー状況の下では、彼らの言動は、プロレタリアートに解体的影響を与えつつある。彼らの主張がどんなに皮相的であり、つまらぬものであるとしても、それは今日の資本主義・帝国主義の現実を根ざしており、この点ではウルトラ的なマルクス教条主義よりは現実を反映しているのである。われわれはこうした人々にたいする批判を通して現実を止揚するための理論を鍛えねばならない。だから批判はトータルなものでなければならぬ。彼らの主張の根拠にまでさかのぼって批判は遂行されねばならない。

レーニン『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』や

『カール・マルクス』において、マルクス主義はカント、ヘーゲルらのドイツ古典哲学、スミス、リカードらの古典派経済学、サンシモン、フーリエらのフランス社会主義を源泉とし、それらを批判的に継承しつつプロレタリアートの革命理論として自らのうちに総括している、と述べた。それゆえレーニンは例えば『カール・マルクス』においてプロレタリアートの階級闘争の戦術・国際共産主義運動の歴史の総括について一節をもうけ、革命理論としての総括性についてとくに読者の注意を促している。

かかる革命理論としてのマルクス主義へのマルクス葬送派&co.の攻撃は、革命理論としてのその実践性にたいするものとして開始された。レーニン主義の否定がますますさきになされた。スターリン主義批判をレーニン主義批判に直結し延長するところから戦術・組織にかかわる領域、階級闘争・国際共産主義運動の歴史の総括にかかわる領域が投げ棄てられた。つづいてプロレタリアートの独裁・社会主義にかんする理論が一掃された。プロレタリア独裁・社会主義は資本主義と単純に並列され、むしろ後進国特有のものとして資本主義以下のものでされた。ただ、共産主義の原則的な部分は、人間論的に昇天させられ、彼らのなぐさみものにされた。

こうして革命理論としての総括性は破壊された。かくて皮肉にもマルクス流行がはじまった。個々バラバラの言葉や章句をもとに自称マルクス家(決してマルクス主義者ではないわけだ)が続々と輩出した。

唯物史観は当然のこととしてスターリン主義的歴史法則主義を生みだす源泉としていち早く葬りさらられていた。この領域では文化人類学の採用が従来の第三世界論と結びつき、歴史観が豊かにされたと宣言された。これと並行して先進国の歴史については、冷たい歴史法則にかわって民衆の生活、生きざまを掘りおこし、民衆の意識や感性を探り、歴史に暖かみをとりと自ら自称する社会史が風靡しはじめた。

もちろん唯物論もスターリン主義的俗流唯物論批判の域をはるかにこえていとも簡単に放擲され、新しい認識論がうちたてられたと宣言された。例えば高橋洋児君は言う。

「『存在』と『認識』をそう単純に分離してよいものだろうか? 物は、それが何らかの規定的な、一定の質をもつ物である限り、何らかの仕方での実践的に認識されるときにはじめて『存在する』、と考えるべきではないだろうか?」(『物神性の解説』pp.86)

「存在の問題は、すぐれて諸個人間の社会的認識連関の問題である。あるいは、認識行為が生活活動の一形態であるという点を強調していえば、それは諸個人間の社会的活動連関の問題である」(同p.83)

「意識の契機なしには当の物は存在しない。……さりとて、意識の契機なしには全く何も存在しないというわけでもない」(同p.84)

全くもって深遠な哲学が生みだされたものだ(しかし、なんとも古くさいシロモノだ。経験批判論そのものではないか)

だが、彼らのまえにはまだ『資本論』がそびえていた。これが打ち倒されねばならなかった。課題のぼせられた以上、解決されるはずであった。そうして実際解決された。しかも『資本論』のもっとも根底をなす商品・価値論にたいして一撃が加えられ、この巨大な城砦はつきくずされた、とみなされた。

全てこうしたことが、ここ数年でなしとげられ、イデオロギー界はこれまでになく活気にみちているというわけである。偉大な戦闘を勝ちぬいた英雄たちは、そのあまりの勇猛さのゆえに、ほどなく互いに覇をきそわねばならなくなった。マルクスを打ち倒した歴史上稀有の勇者たちの戦いがはじまった。英雄にはいささかふさわしくないのしりあいや、ケチくさいケンカ、下品なカゲロが横行して彼らの「権威」をやや落としたが、尚彼らは意気軒昂であった。決着はいまだついていないそうである。

こうした「激烈な戦い」にたいして、世の多くの「マルクス主義者」たちは、冷やかな目を向け、嘲笑しつつ、しかも根本的な批判をなしえないでいる。根本的批判を遂行する能力を持たないままに単に冷笑し、無視している。わが「マルクス主義者」たちはまるで「箱のなかの男」になったかのように現実から顔をそむけ、かの英雄たちのお祭り騒ぎの根拠はなにか、いかなる資本主義・帝国主義の現実に根ざしているのかを分析しようとしていない。

われわれは本誌5.22でエコロジストに転落した白川真澄を批判した(「マルクス批判によるマルクス以前への回帰—白川真澄』も一つの革命』批判)」。本稿はそれに続いての現代イデオロギー批判の一作である。とりあげるのは『資本論』を一つのテキストとして読むとか称してマルクスの商品—価値論を否定し、マルクスが一蹴したベリーの水準に落こんでいる人々である。とはいえ今日のベリーはマルクスの時代よりはるかに資本主義—帝国主義によって支えられており、その表面的な現象に振り回されている。

I 価値形態が核心としていつつ価値形態を分析しない柄谷とその仲間たち

柄谷行人をはじめ、今村仁司、岩井克人、浅田彰といった人々は、価値形態論こそマルクス商品—価値論の核心である、と声高に叫びたててはいるが、全く不思議なことに彼らの誰一人として当の価値形態論そのものについてまじめな分析をしておらず、結局、貨幣論で済ませている。貨幣の謎(これは決して貨幣の歴史的生成過程をいうのではない)を探るために、価値形態の分析に向ったマルクスにたいし、柄谷らは価値形態論が重要だ、と大騒ぎをしながらそこを素通りし、貨幣論にまいるもどき、あれこれ好き放題言っているに過ぎない。柄谷、岩井、浅田は次のように放言している。

「浅田……『価格—利潤率』の系列と『価値—剰余価値』の

批判者として登場した代々木系学者山本広太郎は、『差異とマルクス』(青木書店)において、二、三の興味ある主張をなしつつも、全体を貫く考え方としては投下労働価値説に陥っている。彼は、マルクスがいかにスマイス、リカードらの投下労働価値説を止揚したのかに無自覚である。

ところで他方、柄谷らはこの山本らの投下労働価値説を批判し、それでマルクス経済学を批判したつもりになっており、また、マルクス自身にたいしても投下労働価値説の限界の痕跡を「発見」しているのだが、実は彼らも山本らと同一の水準にあるのであって、単なる反対極に立っているに過ぎない。だから、不可避にかつてのリカードにたいするベリーの立場に落ちこんでいくのである。

例えば柄谷は、『マルクス』『資本論』から、

「普通の言い方で、商品は、使用価値または交換価値である、と言ったが、これは厳密に言えばまちが이었다。商品は、使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである。商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現れるのであって、商品は、孤立的に考察されたのでは、この交換価値という形態をけっしてもたないのであり、つねにただ第二の異種の一商品にたいする価値関係または交換関係のなかでのみこの形態をもつのである。とはいえ、このことを知っておきさえすれば、さきの言い方も有害なものではなく、か

系列のある種の同値性は数学的に証明できる事実であって、「実体/形態」とか「本質/現象」とかいうのは全部ダメになっている。……ある種のマルクス経済学者というのは、いまだに『形態』が『実体』をつかむとか、本質としての『剰余価値』が『利潤』として現象するとか、信じがたいことを言っているわけだ。

岩井……『労働価値説をどのように論証すべきか』なんて出てくる、いまだにね。

柄谷……それはマルクス主義者だけだね。本当に外に出れば通用しない議論だから。

浅田……特に驚くのは、転形問題なんていまだにやってるのね。総価値=総価格、総剰余価値=総利潤、という二つの命題を保存するようなかたちで『価値』という本質は『価格』という現象に転形できるだろうか、と。これは実に簡単な行列の反復問題であって、そんなことは特殊な場合を除いてできないに決まっているわけですよ。それをなんと数値例なんかでやろうとする。まさに形而上学の段階にいるわけ。」(「マルクス・貨幣・言語」『現代思想』'83.3.p.244)

彼らのマルクス経済学への批判は、マルクスの労働価値説をスマイス、リカード的な投下労働価値説へと逆行させているスターリン主義的「マルクス主義」にたいするものであるかぎりにおいてあつていないわけではない。例えば、柄谷らの流行りの主張にたいする

えって、簡単にすることに役立つのである」(国民文庫版p.115—116)

というところを引用し、これにたいしてマルクスの限界を「発見」して言う。

「しかし、このいい方は、つねに有害だといっておいた方がよい。一商品に内在的な価値があるかのような考えを斥けるときにこそ、『価値形態』がみいだされるのに、上のいい方はそれ自体いつもわれわれを元にひきもどすからである」(「マルクスその可能性の中心」p.26)

この見解はほぼベリーのものと同じである。柄谷はこれをくりかえし強調する。

「価値が価値形態、いいかえれば相異なる使用価値の関係においてあるという事実云々」(同p.26-27)

「商品の価値が関係の体系においてある云々」(同p.80)

これと次のベリーの主張とくらべてみよ!

「価値にとって欠くことのできないことは、二つの対象物が比較されねばならぬことである。価値は単独に、また他物との関係なしに、考察された一物の属性なりとすることはできないのである。……従って価値は絶対的または内在的なものを指すのではなく、二つの対象物が交換される商品として相互に対立する関係を指すにすぎない」(「リカード価値論の批判」日本評論社 pp.3-4)

柄谷が価値は「関係においてある」といい、ベリがそれは「関係を指す」といい、双方の表現は異なるとはいえず、内容はほぼ同一である。柄谷は言葉の隣にかくれているに過ぎない。価値は関係においてある。というとか何かしら価値は関係とはべつもののようにみえるが、しかし柄谷は価値とはなにかについてなんらの分析をしないままに、内在的な価値を、したがって価値の実体をただ一方的に否定しているのだから、柄谷はたんに言葉遊びをしていることになる。価値とはなにかを分析するためには、かの関係そのものの内実が分析されねばならないのであるが、柄谷はそこで貨幣を前提とした無内容な議論をしているのである(後述)。

柄谷らが不断にベリりの立場に転落していくのはなぜかといえ、商品の内在的価値を否定し、だから価値の実体たる抽象的人間労働を虚妄の議論として棄て去るからである。柄谷らはスミス、リカードと同一の水準からマルクスの労働価値説をとらえ、価値の実体たる商品で表示された抽象的人間労働を投下労働価値説にとらえているわけである。この点では先の山本らと同一なのである。

スミス、リカードらの投下労働価値説においては、商品の価値の実体を商品に投下され、それに含まれている労働としたのであるが、その価値実体たる労働とは何か、なぜ実体とされるのか、を分析することができなかった。彼らは結局実体的なレベルで価値実体をとらえていたといえる。これはどういうことなのかといえ、価値実体たる抽象的人間労働とは何か、なぜそれは社会的実体

なのであるか、を明らかにするためには、価値形態の分析によらねばならないのであるが、彼らは商品で表示された労働の二重性を発見しえず、したがって価値の形態の分析にすむことができて、価値の量の分析に終始したということなのである。価値形態の分析によつてはじめて価値を形成する労働(商品生産における生きた労働)の特質が明らかになるのであり、価値実体たる抽象的人間労働のなんたるかが鮮明になるのである。こうしてはじめてマルクスが商品で表示される抽象的人間労働をなぜ社会的実体だと呼んだのかが明らかになる。

マルクスは商品で表示される労働の二重性を発見し、価値の実体を抽象的人間労働としたうえで(第一節、第二節)、ここからその価値実体たる抽象的人間労働とはなんであるのか、なぜ社会的実体であるのかを価値形態の分析において示している(第三節)。したがってマルクスより前の労働価値説からマルクスの労働価値説が区別されるのは確かにまずなによりも価値形態においてなのだが、これを決して形式的に理解してはならないということがわかる。マルクスがどのように従来の労働価値説を止揚したのかがはっきりとつかまねなければ、いつまでも柄谷や山本らが生みだされることになる。

II マルクス商品―価値論を投下労働価値説に逆行させる代々木一派

柄谷らの見解を批判するまえに、まず、マルクスの商品―価値論をスミス、リカードらの投下労働価値説のレベルにまでおとしめているスターリン主義経済学―代々木一派の見解を批判しておく。

先の山本広太郎『差異とマルクス』をみよう。山本は、マルクスがスミス、リカードらの古典派経済学とベリりの俗流経済学とを区別したことをもって、マルクスも投下労働価値説をとっていると思いついて、彼はまずリカードを次のように賞賛するところから始める。

「リカードは、正当にも、諸商品が交換される割合としての交換価値の背後に、投下労働量によって規定される価値を探りあててゐる」(p.130)

この点ではマルクスも同様だと山本は考えている。ここでは山本も山本は口をすべらせている。「投下労働量によって規定される価値」と投下労働価値説を克服しなかり価値形態の把握ができず、価値の実体を実体的にとらえるところから抜け出すことができない。それゆえ、価値の量にとらわれざるをえなくなる。山本もこの例にもれない。こういう次第なので、彼がいかにリカードの限界を云々し、リカードは価値形態に関心を払わなかった、とか価値と交換価値の区別を徹底しなかった、とか言ってみても空しいものでしかない。彼は投下労働価値説から抜け出すことができず、価値実体を実体的にとらえているので、個々の商品生産者の生

きた労働の直接の延長上に価値実体をとらえ、不断に生きた労働と商品で表示された労働とを混同し、また価値と価値実体とを混同している。しかし山本は価値と価値実体との混同をやはりおかしいと思ったのか、「抽象的人間労働の凝固と価値とは区別しなければならぬ」(同p.133)とそれ自体は正しそうなことを言う。だが彼は実は全く間違っていたことを言わんとしているのだ。彼は言う。抽象的人間労働の凝固というのは単に自然的規定であり、それを社会的実体として、歴史的なものとしても規定してはじめて価値だということである、と。

「『資本論』の場合には、価値はたんに抽象的人間労働の凝固である概念規定されているのではなく、社会的実体の結晶となっている抽象的人間労働の凝固である、いわば二重に規定されていた。価値が社会的なもの、歴史的なものであることを言うためには、一方ではその自然的な根拠としての抽象的人間労働の凝固にまでさかのぼらねばならず、他方では、その歴史的な条件、その社会形態を明らかにしなければならなかったのである」(同p.134)

ここでは価値実体たる商品で表示された抽象的人間労働を生きた労働と混同し、生理学的意味での労働の支出として価値実体たる抽象的人間労働をとらえていること、さらに価値実体と価値との混同をしていることがはっきり示されている。生きた労働の抽象的人間労働という属性は生理学的意味での労働としか規定することはでき

ないが、他方、商品で表示された抽象的人間労働はもはや自然的なものというわけにはいかず、社会的実体なのである。しかも価値とはこの社会的実体そのものではなく、かかる実体の反射規定でしかありえない。

ところでは山本は広松渉がマルクスはリカードとペーリの両刃の批判を遂行したのだ、と主張していることに噛みつき、マルクスにあってはあくまでリカード批判のほうを中心問題であったと、それ自体は正しいことを強調しつつも、マルクスがいかに投下労働価値説を止揚したのかをとりえていない。マルクスがミス、リカードらの投下労働価値説を俗流経済学から明確に区分し、より高い評価を与えたのは、投下労働価値説が、価値の実体を労働にとらえ、これによってはじめて商品—価値を科学的に分析しうる端初が与えられたからであり、またここからブルジョアの生産関係の内的関係を明らかにする礎石が置かれたからである。他方、俗流経済学の方は、価値のうちにただ社会的形態だけを、またはむしろ社会的形態の実体のない仮象だけを見、したがって、ブルジョアの諸関係の現象をただなでまわすだけに終始したのであった。

だがこのことをもってマルクスが投下労働価値説をとったということにはならない。

古典派経済学は商品进行分析し、価値の実体を労働一般としてとらえた。だが彼らは商品が使用価値と価値との二重物であるかぎり、商品で表示された労働もまた二重のものであることをとらえず、し

とする商品A（もちろん、商品Aは既に商品世界の一分子であってもよい。だが他方、商品Bは新たに商品世界に参入するものであってはならない）として、商品Aは自分を価値物として実現するため、商品Bを自分に等置する。このとき商品Bは「価値物として、価値の存在形態として認められ」ている。そうでなければ商品Aは自分を商品Bに等置しなかつたであろう。商品Bはどんな姿態をしていようと純粹に価値を代表し、価値物としての意義をしかもってはいない。

かかる商品Bを商品Aが自分に等置することによって、商品Bに含まれている労働は商品Aに含まれている労働に等置される。ところでたしかに商品Bをつくる労働は商品Aをつくる労働とは種類を異にするある一定の具体的な労働である。しかし、商品Aをつくる種類を異にする具体的な労働との等置は、商品Bをつくる労働を事実上、双方の労働のうちの現実と等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に還元する。このような廻り道を通して、次には商品Aをつくる具体的な労働もまたそれが価値を生むかぎりでは、商品Bをつくる具体的な労働から区別される特徴を何ももっていないというところ、つまり人間労働一般に還元されていることがいわれている。このようにして商品Aをつくる具体的な労働は人間労働一般に還元され、かかる人間労働一般の生産物として、かかる人間労働一般の凝固物として、商品Aは価値、価値物と認められる。ところで商品Aが自分を商品Bに等置したということは、そこで

たがって、価値形態を—即ち、「ブルジョアの生産様式の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態」の分析にすすみえなかつた。だからこそ価値実体をただ漠然と実体主義的に規定するしかなかったのである。

抽象的人間労働がなぜ価値の実体であるのか、なぜ社会的実体であるのか、といえば、諸商品の価値形態—価値関係においてはじめ諸々の私的労働が、人間労働一般に還元され、それを通じて社会的労働として認められるからである。商品生産者たちが「彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。」相互に独立して営まれる私的労働は、かかる価値関係において不断に人間労働一般に還元され、かくして社会的労働として認められるのであり、かかる私的労働の生産物は価値物—商品となり、だからその商品に表示された人間労働一般—抽象化されたそれは社会的実体として確認される。マルクスにしたがって、

x量の商品A=y量の商品B

という簡単な価値形態にそって説明しよう。ここでは次のように状況設定をするとわかりやすい。既に現実のものとして与えられている商品世界の一分子たる商品Bと、新たにこの商品世界に加わらん

は商品Bが価値として認められているということの意味している。先の労働の分析においても、まず商品Bをつくる具体的な労働が、人間労働一般に還元された。したがって、B商品—この等価値形態においては、はじめから商品Aにたいして交換可能性の形態にあるということ、つまりはじめから社会性をもったものとしてあることを示している。等価値形態にある商品Bにあっては、この現物形態—使用価値が、そのあるがままの姿において直接に価値の現象形態になっている。商品Bの体はそれがどんなもの—物的商品であれ、非物的商品であれ—であってもよい。かくして商品Bをつくる具体的労働は、それ自体で人間労働一般の現象形態になり、商品Bに表示された労働において、具体的な労働はそのままに抽象的人間労働の現象形態となる。ここからして商品Bをつくる具体的な労働は、それ自体としては他の諸々の具体的な労働と同様に私的労働であるにもかかわらず、この価値関係の中において、その私的労働がそのままに社会的形態の労働として認められるのである。

等価値形態におけるかかる特徴—使用価値が価値の現象形態になり、具体的な労働が抽象的人間労働の現象形態になり、私的労働が社会的形態にある労働になるということ—によって、商品Bははじめから、それ自体として社会的なものを代表するのであり、これにたいする反射においてはじめて商品Aもまた社会的なものとして自己を表現し、実現するのである。だから、商品Aをつくる労働—その私的労働は先の廻り道によって人間労働一般に還元されるだけ

ではなく、同時に社会的労働に還元されるのである。ここではじめて商品Aにふくまれていた労働商品Aで表示されている抽象的労働労働は、価値実体として社会的実体として認められているのである。

かくて、等価形態にある商品Bがあるがままに、その使用価値そのものが有用な属性をもっているのと同様に、交換可能性という性質を生まれながら内的属性としてもっているかのように見えることになる。ここでは具体的なものが抽象的一般的なものとなる現象形態になるという転倒が生じているのである。

「価値関係およびそれらにふくまれている価値表現のなかでは、抽象的一般的なもの、感覚的現実的のもの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なものが抽象的一般的なものとなる現象形態または特定の表現形態として認められるのである。[20]ヘレのリンネル＝一着の上着という価値関係においては「等価物たる上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現のなかで、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の表現形態として認められるだけなのである。この取り違えは不可避である。というのは、労働生産物で表わされている労働が価値形式的であるのは、ただ、その労働が無差別な人間労働であり、し

ある。

商品で表示される抽象的労働人間労働が価値実体社会的実体であるということはこのようなことである。

だからわれわれが社会的実体とはどういうことか、抽象的労働労働とはなにか、を考えると、われわれは単に個々の商品や個々の労働を表わしてはならないのであって、あくまで与えられた社会における商品の総体、そこに表示された労働の総体を念頭におかなければならない。そうしてはじめてわれわれはなぜマルクスが社会的実体といったのか、なぜ抽象的ではない労働といったのかをわ

かる。
山本ら投下労働価値説論者たちはかようなマルクスの分析をとらえていない。彼らはあくまで個々の商品をまず表わし、これにどれだけ量の抽象的労働が対象化されているかを考え、価値物となるといったふうを考えているのである。だから先に山本の例でいったように、価値形態を分析するのに価値の量にいつまでもとらわれているのである。山本の先輩にあたる金子ハルオの『経済学上』（新日本新書）を見ると次のような記述にぶつかる。

「商品が価値をもつのは、けっきょく、どの商品もみな人間の労働が結晶したもので、たがいに等しいとして交換されるといふ共通の性質をもっているからなのです。この性質を商品の価値」といふ、価値の実体は、その商品にこもっている人間の労働で

たがって、一生産物の価値に対象化されている労働が別種の一生産物の価値に対象化されている労働とまったく区別されないかぎりにおいてのみのことだからである。この転倒によってはただ感覚的具体的なものが抽象的一般的なもの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なもの具体的なものの属性として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである」（『資本論 初版』国民文庫 p.142-143）

社会的実体がまずあって、これが商品のうちに抽象的労働として凝固して価値となるのではない、それは投下労働価値説の考え方であろう。そうではない。現実商品世界が現存しており、そこに無数の価値関係が現存していること、これは幻想でも、思考産物でもなく、現実の物的世界であり、そうであるがゆえに商品に表示されている労働が抽象的労働人間労働という属性において価値の実体社会的実体なのである。しかもあくまで抽象的なものとしてである。

この商品世界にあっては、人々は社会的関係を持たんとすれば、一般的に言って、商品相互の関係をを通じて関係をとり結ばねばならないのであって、これ以外に社会的関係を持つことができないのである。自らの社会性、この社会の一分子であることの確認は、商品相互の関係、価値関係において自らの具体的労働が抽象的労働人間労働という社会的労働に還元されることによつてはじめてなされるので

商品の価値の実体は、かならずその商品にこもっている人間の労働（社会的労働）であつて云々」（同）

「商品の価値は、抽象的労働によつてつくられるのであり、価値の実体は抽象的労働にほかなりません（この労働は、たんに頭のなかだけで考えだされた観念的のものではなくて、実際にあらゆる種類の労働のなかに共通にふくまれている現実的のものです）」（p.44）

まったくもつてめちゃくちゃな議論である。『資本論』でマルクスがいう価値関係の基礎にある共通の第三者とは価値の実体であつて価値ではないのであるが、金子は両者を混同しているため、「諸商品が価値をもつのは諸商品に共通な性質たる価値をもっているからだ」というトロツキーを平気で述べる。しかも商品で表示されている抽象的労働をきわめて実体的にとらえ、商品にそれが「こもつて、価値となる」という、彼のような議論からすれば価値の実体はオバケのようなものとしかなりようはなく、まさしく観念的なののであるが、これをわざわざ「観念的のものではなく、現実的のものだ」とことわるところは気の毒としかいようがない。

このような投下労働価値説的主張こそ、彼らの資本労働関係にたいする批判が搾取のしくみ論のレベルにあること——何時間分の労働が搾取されたといった類の批判——に照応しているのである。だが、くり返すようだが、とらえねばならないのはまずなによ

りも総商品―総労働であり、個々の商品はその一分子だ、ということである。だから代々木一派がよくやるような、何時間分の労働、それゆえこれだけの価値とかいった議論は実際の場においてはまったく不毛なものでしかない。マルクスは述べている。

「生産された総価値が、生産物の数に分割されて、個々の生産物の価値を規定するのであり、そして、生産物は、ただこのような加除部分としてのみ商品になるのである。個々の生産物の価値を規定し、それを商品として成立させているのは、もはや個々の特殊な商品に充用された労働ではない。すなわち、たいていの場合もはや計算することがまったくできないし、またある商品のほうが他の商品の場合よりも多いことがありうるような労働ではない。それは、総労働であり、その一加除部分、つまり総価値を生産物の数で割った平均である」(『資本論草稿集 7』p.185)

III 象徴貨幣論者への橋渡し役たる広松渉

柄谷らの見解を背後から支えているのは広松渉である。彼は、「そもそも『抽象的人間労働』とは何であるのか？果たしてそういうものが実在するのか？実在すると強弁するとき、それは形而上学的・超自然的な実在を提出することにならぬか？そういう、わけのわからぬしろもの。の『凝結』とはいよいよ珍奇であろう」(『マルクス主義の地平』p.228)

字野の経済原則と同じで、このような広松の議論はまったくもって不毛であり、何も言ったことにはならない。一社会の社会的分業体制をそれ自体とりあげるなら、社会学的静態的分析はいくらでも可能ではあるが、そしてまたそれはそれで一定の意義をもつてはあろうが、商品世界―商品関係、そしてまさしく広松が課題とした価値実体―抽象的人間労働とはなにか、なぜ社会的実体なのか、は決して明らかとはならない。

一体なぜ「即時的」なのか？分析され、説かれねばならないのは、なぜ商品生産者たちの生産物は私的労働でしかありえないのか、それがどのようにして商品＝社会的生産物となるのか、ということ、広松のいう「媒介」の内実である。広松のように、説明すべきことを説明ぬきに語ってはならない。

分析すべき商品世界から離れて社会的分業体制に行きつくこと、広松は商品世界、この現存する世界を事実上忘却してしまう。かくて、彼は社会的分業体制から「反照規定」なることばでかたがたかっている観念世界にとびうつってしまう。反照規定の中味を説明すべく広松がもちだすのが間主観(共同主観)とか四肢的構造連関とかである。ここにおいて彼は投下労働価値説批判というかたちでマルクスの商品―価値論を否定し、今流行りの象徴貨幣論への水路を開くことになる。少しくり返しをすることになるが広松の主張を跡付けてみよう。

「具体的有用労働と別途に抽象的労働なるものが実在するわけでは

ない。……もしそのような抽象的人間労働なるものが実在する

とすれば、それは一種の形而上学的存在と呼ぶべきであろう

し、そのようなものが文字通りの意味で『凝結』して『価値』になるのだとすれば、一部のマルクス批判家が言うように、マルクスの価値論はまさしく一種の形而上学だという結論になりかねない」(同p.158)

「抽象的人間の労働なるものが在って、それが文字通りの意味で凝結して、価値なるものに転成するわけではない」(同p.181) ここまではそれ自体としては正しい。先にみた山本や金子らのようなマルクスの労働価値説を投下労働価値説に逆もどりさせる主張にたいしては意義をもっている。だが、広松はこの問題提起から更にこれを「掘り下げて」いう。

「普遍的抽象的な主体＝実体として、それが自己外在態に転変して価値実体と成る在るもの、そのような *etwas* として表徴されているところのものは、いかなる関係規定の屈折した投影であるか。従ってまた、価値実体ということに私念されているところのもの、その真実態は何であるか」(同)

「いかなる関係規定の屈折した投影であるか」というところに集約的にあらわれているように、既に広松は間違った道に一步を踏み出していることがわかる。商品世界そのもの―商品相互の関係としてしかあらわれることのない商品生産社会の社会関係の内実を分析することが眼目であるのに、それから離れて何かしら別個の人間相

互の関係——広松のいう労働の社会的編制を考えているのである。

広松は投下労働価値説論者にたいし、くり返し、「まず何か価値実
体としての抽象的労働なるものがあってこれが凝結して価値に
なるなんてことはないのだ」と、説教する。だが一方、広松のほう
は、労働の社会的編制がまずあって、この関係が間主観的に自存化
されて価値実体になるとされる。しかもそれはその主張からして実
体ではなく一つの観念—意識でしかありえない。

「人々は、価値実体なるものが先ず在って、それが第二次的に諸
関係をとり結ぶかのように思念する。しかし、人々が価値実体と
して思念しているところのものは、実は、かの間主観的な機能的
諸関係の結節を自存化したものにほかならない。……人々が普
遍の本質として私念しているところのものは、実は、間主観的に
一致して *gleichsetzen* されている機能的諸関係（これは多岐多様
であり、それぞれしかるべき歴史的・社会的、そしてまた自然的
な根拠をもつ）を物性化して事物に凝縮的に帰属させたものにほ
かならぬ」（同p.135）

「かの間主観的な機能的諸関係の結節を自存化したもの」とか
「間主観的に一致して *gleichsetzen* されている機能的諸関係……
を物性化して事物に凝縮的に帰属させたもの」とかが一体どうい
うことなのか問題である。これを探るためには、広松がどのように
価値形態を理解しているのかをみなければならぬ。

広松はマルクスが、x量の商品A=y量の商品B、の関係におい

るのであるか？われわれは、すでに、Bという本人にとって *sein*
には具体的な主体が、Aにとっては、抽象的人間、として映
現する経緯を見ておいた。……ここにおいて、Aは、彼がBを
理解しうるかぎり、次のことを了解しうる。それは、本人にとっ
て対目的には具体者たる者が、対他的には抽象的人間として映現
するという事態である。ところが、この事態は、AとBとに共軛
的である。彼は相手Bの眼にはどう映ずるであろうか。Aは対自
的には具体的主体であるとはいえず、Bに対して対他的には抽象的
人間であり、相手の生産物上衣が自己の生産物リンネルに等置さ
れたということは、相手Bにとって自分Aの生産物が抽象的人間
的労働の体化物として対他的に指定されているという事態にある
こと、このことがAにとって対自化される。この対他的な対自化
がすなわち、価値物としての上衣と等置されるという「廻り道」
によって自己の生産物たるリンネルもまたそこではじめて価値物
として妥当するということ。……こうした対他—対自—対自—対
他的な反照規定 *Reflexionsbestimmung* においてはじめて、AとB
は互いに他者の生産物を価値物として、そして、対他的被媒介性
において各々自己の生産物をも価値物として、相互共軛的に認知
するのである」（同p.142, 143-144）

なぜこういう独特の廻り道が広松にとって必要であったのか、こ
の解答こそ先に提示した問題への解答である。つまり彼は価値—価
値実体を社会的労働配分—社会的分業体制に規定されたものだとい

て別決してみせた廻り道について彼独自の解釈をおこなう。商品A
=商品Bの等置において、商品Bをつくる労働はまず抽象的労働
に還元されるとマルクスはいうのであるが、広松は商品Bをつく
る生産者がまず抽象的人間に還元され、かかる抽象的人間の労働と
して商品Bをつくる労働が抽象的労働に還元されるのだ、とい
うのである。商品Aにおいても同様に商品Aをつくる生産者がこれ
を通じて抽象的人間に還元されると考えている。

「A「リンネル」上衣におけるリンネル所有者」は相手の生産物
たる上衣を「勝手に」価値物なりと「宣言」するのではない—A
は上衣の生産者が、自分にとって *sein* 抽象的人間……
として *gleich*し、従って、上衣がこの、抽象的人間の、生産物た
るかぎり、抽象的人間の労働の体化物たる上衣を対目的にリン
ネルと等置していることになる」（同p.142）
こういう構図は、宇野が価値関係において、その背後に商品所有
者の欲望を想定することと瓜二つである。

「Aにとって、織布という自分の労働が抽象的人間の労働として
対自化され、その生産物たるリンネルが価値物として対自化され
るのは「廻り道」を介して、すなわち、対他的被媒介性におい
てである。……ここで問題になるのは、Aの対他—対自—対
自的—対他存在である。……リンネル生産者Aは、他者Bにい
かなる仕方で自分を映してみるのであるか、そして、そのこと
によって、彼はいかにして、抽象的人間、としての自己を対自化す

う不毛な議論を展開するので、ここからはどんなにしても価値—価
値実体の何たるかは明らかにしえず、結局価値関係において商品所
有者が相互に相手の労働生産物を商品として了解しあう論理—意識
過程をもって価値—価値実体の説明としているのである。間主観、
共同主観、二肢的構造、四肢的構造といった広松の大じかけの道具
はそこでは何の役にもたはししない。彼は商品生産社会においては
商品相互の関係においてしか人間相互の社会関係はありえない、と
いうことがわかっていない。商品世界がまずもって現存しているの
だ二人々はこの社会にあっては、他の人々との社会的関係を取り結
ぼうとすれば現実にある商品世界に入らねばならないのである。互
いに労働生産物を価値—商品として等置しあうことによって自らの
社会性を確認し、実現するのである。意識過程をもって社会関係か
取り結べると私念することができるのは、広松のようなインテリぐ
らいのものである。

広松は結局抽象的労働が社会的実体として価値実体であるとい
うことを明らかにしえなかったものであり、これを意識過程—観念
世界へと昇天させてしまったのであった（いかに共同とかの修飾語
を付そうとも）。かくて広松は今日流行りの象徴貨幣論者—柄
谷、岩井、浅田らの正統なる後継者を持つことになったのである。

（国崎）

共産主義者同盟（火花）発行パンフ紹介

★ われわれの綱領と戦術テーゼ

★ 五分冊パンフ

▽第一分冊 綱領原則部分前半 (八〇〇円)

▽第二分冊 綱領原則部分後半 (三〇〇円)

▽第三分冊 ソ連の評価について (三〇〇円)

▽第四分冊 帝国主義批判と民主主義問題 (三〇〇円)

▽第五分冊 プロ独編集委の綱領批判 (三〇〇円)

★ 新たなインターナショナル・ビューロー
をめざして三〇〇円

▽新たなインターナショナル創建・単一非合法党建設
の事業をとおしすすめよう！

▽どのような「道」をすすんではならないか、そして
われわれの「道」とはなにか？

▽連合赤軍判決と連合赤軍問題の総括について

▽代表者会議の意義からみたわれわれの歴史

★ 朝鮮プロレタリアート・人民との

連帯をめざして！

▽真に革命的な朝鮮プロレタリアート・人民との
連帯とは？ 二〇〇円

▽「日朝連帯」とプロレタリアートの任務

▽在日朝鮮人問題にたいし、プロレタリアートは

どういう態度をとるべきか

▽人管体制再編粉碎！二つの朝鮮政策反対！米日「韓」

反革命軍事体制打倒の先頭にたちプロレタリアート

の戦闘的団結を勝ちとろう！

★ 中米革命の一教訓 二〇〇円

★ 日本共産党批判 二〇〇円

★ 革共同イズム批判 二〇〇円

▽「反スタ・トロツキズム」の誤り

▽社・共への追従と「無党派」への迎合

▽「先制的内戦戦略」批判

★ 反核運動に対する我々の態度 二〇〇円

▽原水禁運動の破産と今日の「反核」運動

▽「反核」のスローガンについて

▽反核運動におけるきまり文句

★ 三里塚闘争の「分裂」に対する我々の態度 一五〇円

▽プロレタリアートは三里塚の「分裂」にたいし、

どのような態度をとるべきか？

▽三里塚闘争討議資料―今回の「分裂」問題にたいする

われわれの態度の確定にむけて―

★ 春闘に対する我々の態度 一五〇円

▽労働運動のブルジョア的歪曲と闘争し、労働者階級の

実力闘争を組織しよう―八四年春闘とプロレタリアー

トの任務―

▽プロレタリアートはなぜ、準備会春闘―統一労組懇

春闘に反対しなければならないのか？

★ 三里塚闘争に関して 一五〇円

▽運動報告―「分裂」集会はなにを示しているのか

▽報告―九・一五と十・九について

▽三里塚闘争の現局面とわれわれの課題

★ 反核とソ共・日共 二〇〇円

▽米ソ「共同声明」と日ソ共産党「共同声明」はなにを
しめしているのか

▽日本共産党の「マラーバー政治の内紛」

近日発行予定パンフ

☆ロシア革命の教訓

▽労働独裁と永続革命

▽ロシア革命とボリシエビキ

☆レーニン組織観復権のために

☆革命的學生運動の創建に向けて

▽「學生運動と労働運動の結合」をめぐって

▽「階級的労働運動との結合」のスローガンについて

― 學生運動の革命的再建のために ―

☆労働組合の獲得に向けて

▽社会排外主義と労働運動

▽求められているのは共産主義革命・革命党と

結びついた労働運動ではないのか

☆労働情報グループ批判

▽「労働情報」グループは、労働者をどこへつれて

そこうとしているのか

▽岐路にたつ「労働情報」グループ

☆教組運動によせて

▽教育臨調に対しプロレタリアートはどういう態度をとるべきか

▽またしても労働官僚どもの裏切り

▽官僚主義対ブルジョア自由主義

☆権力分析

▽自衛隊の機構

▽日帝警察権力の特殊部隊の実態

▽肥大化する警察の情報・通信機器

▽電話盗聴の実態について

火花 第四六号

発行日 一九八五年六月一日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定価 三〇〇円